

講義ノート (5)

～シナイ半島調査 (その 1)～

こんにちわ。第 5 回です。前回は少し肩のこるような話になってしまいましたので、今日はあまり理屈っぽくない話にしようと思います。1990 年代におこなったエジプトのシナイ半島のベドウィン調査の話です。これまでの旅の話や地図作りの話からは時間的にかけ離れてしまいますので、まず簡単にその間の事情を「履歴書」ふうに戻ってまいりたいと思います。

第一の旅から地図作り、そして赤坂小町の旅と続いたあと、日本に帰ってから約 2 年かけて大学を卒業しました。卒業まで 6 年かけたこととなります。そのあと 2 年ほど浪人というかフリーターのような生活をし（その間に一度ゼネコンの仕事で、社長の鞆持ち兼通訳として短期間サウジアラビアを訪れました）、その後 27 歳で大学院（東京都立大学）に入って、そこで初めて社会人類学を始めたわけです。もっぱらデスクワークで、先輩や友人たちから人類学の基本をたたき込まれました。修士課程から博士課程にかけて約 6 年ほどおとなしく「勉強」をしていましたが、33 歳のとき（1985 年）、モロッコの日本大使館で専門調査員として働くことになりました。約 3 年間勤め、その間におこなったモロッコ各地でのフィールドワークは形を変えながら現在まで続いています。そのときの話はこの授業の次々回以降のおもなテーマになります。その後モロッコから帰って大学院を修了し、3～4 年の就活期間を経て大学（二松学舎大学）に生まれて初めての定職を得ました。もう 40 歳近くになっていました。今日お話しするのは、その直後からおこなったフィールドワークです。

\*\*\*\*\*

1980 年代からモロッコの研究に明け暮れていたある日、川床睦夫さんという人から突然「シナイ半島で調査してみない？」というお誘いを受けました。川床さんは早稲田の皆さんの大先輩で、考古学者です。そのときたしかもうすでに 10 年以上エジプトでの発掘調査に携わっていて、私から見ると「エジプトのヌシ」みたいな人でした。強烈なリーダーシップを発揮して何度も発掘隊を組織し、カイロには拠点となる立派な事務所も置き、数多くの報告書も出していました。私より 4 歳ほど年上で、何度か会ったことはあったと思いますが、まだそれほど親しい間柄ではありませんでした。しかしヒジャーズ地方の地名調査の話ときに登場した高井清仁さんが 1974 年の調査後カイロに長期滞在し、そこで川床睦夫さんと親友のような関係を築いたようです。青春時代の戦友といったところでしょうか。なにしろ

1970年代のカイロといえばまだ戦時体制下（イスラエルとの戦争）の混沌とした状態で、そこでなにかをしようというのは大変なエネルギーと忍耐力を要したからです。そんな高井さんとの縁もあってかどうか、私に話が回ってきたのだと思います。

川床さんはカイロ近郊のフスタートという場所の発掘を長くやっていたのですが、この頃（1990年前後）はシナイ半島のトゥールという港町（南シナイ県の県庁所在地）の発掘調査に力点を移し、現場に「トゥール・ハウス」という宿泊施設を兼ねた発掘調査の拠点となる立派な施設を建設して、考古学ばかりでなく歴史学、美術史、文化人類学、建築学、言語学、民族音楽学、情報学、形質人類学、植物学、文化財保存学、分析化学といった多方面の人材を集めた総合調査を企画していました。エジプトの発掘といえば古代エジプトを思い浮かべるわけですが、そして早稲田大学はその中心的役割を担ってきているわけですが、同じ早稲田の考古学出身でも川床さんは「歴史考古学」を掲げ、歴史時代、つまりイスラーム時代とってよいでしょうが、その過去から現在に至る様相を解き明かそうという壮大な計画を推し進めていたのです。その一環として文化人類学の私に声をかけてくれたのだと私は認識しています。

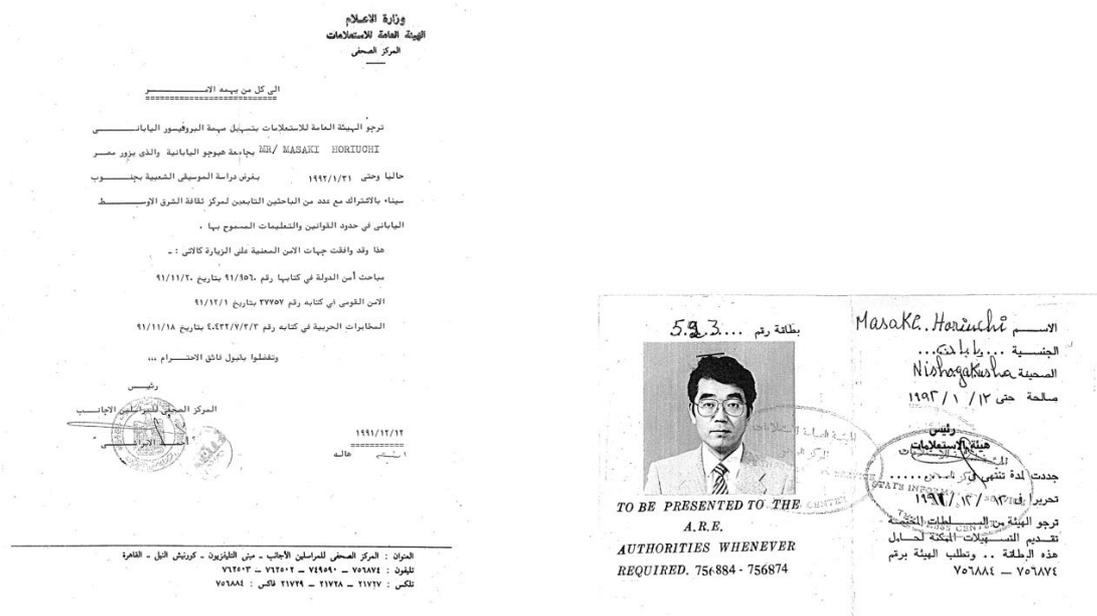
そこで話を聞いてみると、トゥール・ハウスには寝る部屋はもちろんのこと、冷房はあるし、日本式の大きな湯船付きの風呂もあるし、冷蔵庫と酒もあるし、毎日日本食を食べられるし、洗濯も現地スタッフがやってくれるし、「どう？」というわけです。しかも長年の発掘調査で築いたエジプト政府との良好な関係があるから、調査許可もカイロで問題なく取れるというのです。こういううまい話に乗らない手はありませんよね、それまでモロッコでやってきた調査にはそのどれひとつとしてなかったわけですから（笑）。

---

#### <第一次調査> 1991年12月～1992年1月

そんなわけでいそいそとエジプトへ発ったのが1991年12月。大学に勤務するようになってからは比較的長期に海外に行けるのは夏休みと年末年始と春休みに限定されますから、これ以降もフィールドワークはこうした時期だけになりました。さて、上げ膳据え膳のお客様のつもりでカイロに到着したのですが、そう甘くはなかった。旅の疲れを癒やす間もなく、到着翌日には朝から調査許可を取得するために情報省という役所へ行くことになりました。川床さんの事前の計らいだったのですが、わけもわからないままカイロ・ハウス（発掘隊のカイロでの拠点となる事務所をこのように呼んでいました）の専属のエジプト人スタッフに連れられて情報省へ行き、エジプトのお役所ではおなじみの窓口のたらい回しをされた挙げ句、許可証を入手しました。やれやれと思ってその許可証をよく読んでみると、どうやら私はジャーナリストの扱いになっていて、南シナイ県で民衆音楽の取材をするらしいのです。そして許可証だと思ったのはじつは各方面への一種の紹介状だったんです。「こういう人間が行くのでよろしくお取りはからいください」という主旨で、国家公安庁だとか戦時諜報局だとかいかにも恐ろしげな部署にも通知済みらしいのです（下、左）。そし

てそれに対応した身分証明書も発行されました（下、右）。紹介状の発行元は情報省情報局外国人記者センター長となっていました。



この紹介状で「民衆音楽の取材」となっていたのは、この調査で一緒に活動する予定の水野信男先生（兵庫教育大学教授、当時）が民族音楽学を専門にしていたということと、そもそも人類学調査などといういかがわしい内容を前面に出したら怪しまれるだけだろうということ、この2つが理由だったのだと思います。音楽の取材ならば怖い公安から目をつけられることもないだろうという、おそらく川床さんの配慮だったのでしょう。それに対して川床さん率いる発掘隊は、彼が主任研究員を務めていた「(財)中近東文化センター」(三鷹市)に属し、エジプト考古庁との緊密なパイプにもとづいてきちんと手続きがぬかりなく済んでいましたから、私や水野先生は言ってみればこの「本隊」のおまけというか寄生虫みたいなものだったと自分では考えています(笑)。

なお水野信男先生は、日本の民族音楽学の草分けともいえる東京芸大の故小泉文夫のお弟子さんで、ユダヤ音楽やアラブ音楽に関する数多くの著書をお書きで、NHKラジオの「世界の民族音楽」という番組も長いあいだ担当した人です。私よりも一回り以上年上で、小柄で優しい声の持ち主です。このときの偶然のご縁がきっかけで、以後今日まで水野先生とは国内外で多くの調査をご一緒させていただくことになったばかりか、音楽というものに目を見開かせていただく貴重な契機を与えていただきました。学恩のある方です。このときの調査でひとつだけ水野先生に関する忘れがたいエピソードがあるのでご紹介しておきます。あとでお話しするのですが、この調査では水野先生と二人でシナイ半島南部一周の「部族長巡りの小旅行」をしました。そのとき東海岸のヌウェイビアという町の海岸のツーリスト村に泊まったことがあったのですが、早朝水野先生は重い録音機(通称「デンスケ」)

を持って波打ち際へ行き、何か録音しているのです。あとで「何を録音したんですか」と聞いたら、「波の音」という答えでした。波の音なんか世界中どこへ行っても同じだろうとは思っていたのですが、それが違うというのです。場所によって、時刻によって、地形によって、それぞれ違った音なんだそうです。これは私にとってはショックでした。そうした微妙な違いを無視して「どうせ同じだろう」と荒っぽく考えていた自分の頭を殴られたような衝撃でした。そのことをずいぶん後になって話したら、ご当人はすっかり忘れていましたが。



ヌウェイビアの海岸

(後ろに懐かしきヒジャーズ地方の山影が見えます)



左から2人目が水野信男先生

ともあれカイロで紹介状をとったその翌日には、休む間もなく早速シナイ半島のトゥールへと向かいました。どうやら発掘隊のペースは軍隊みたいだと思いましたが、もう遅いですね。発掘隊の何人かの人たちと一緒に、カイロハウスの専属のようにになっている乗り合いタクシーでカイロを発って東へ砂漠道路をひた走り、スエズ運河の真下をくぐるトンネル（日本の企業が建設したもので、第4次中東戦争の英雄の名を取った「アフマド・ハムディー・トンネル」といったのでしょうか）を抜けるとシナイ半島です。そこから右に折れてスエズ湾沿いに南下し、トゥールまであとわずかというワーディー・ハンマ（「炎熱のワーディー」という意味）まで来たとき、突然車のタイヤがバースト（破裂）し、我々の乗った車は路肩から外れて一回転。そのバウンドでまた道路に戻ったのですが、今度は滅多にこない対向車がたまたまやってきて、あわや衝突。我々の乗ったタクシーもそうですが、どの車も超オンボロなのに時速100キロ以上で飛ばしていますから、ぶつかったら一巻の終わりです。対向車は警笛をビービー鳴らしながらなんとかかよけてくれて、そのまま走り去ってゆきました。車が一回転したときは、「ああ、こうやって死ぬんだ」と妙に落ち着いていたような気がします。九死に一生とはこのことかと思いましたが、驚いたのは直後の運転手の言葉。平然とタイヤを取り替えたあと、「俺の運転はうまいだろ。ちゃんと死なずにすんだからね」。そして何事もなかったかのようにトゥールに到着しました。そういえばカイロからの沿道に事故車の残骸があちこちに散らばっていたのを思い出して背筋が寒くなりました。

こうしてトゥールでの生活が始まりましたが、私の場合まったく現地の情報もなく、白紙

状態でしたから、どこで何をやるのか、何も決まっていませんでした。行ってから考えよう、行ってみなければわからない、というのんきなスタンスだったのです。さあ調査だといって現地に乗っ込んで、何をどう調査するのかまったく当てもないというのは初めての経験でした。

ともあれどこの調査でもそうですが、調査の開始に当たってまず重要なことは手続き的な環境作りです。政府機関なり地元の行政機関なり公安や軍などの治安組織なりへの挨拶をしないことには何も始められません。勝手にそのあたりをうろつきまわったり、勝手にその辺の人たちと話したりしたら、お上から目をつけられるのは必至です。また地元の住民の人たちにとっても、「うさんくさいヤツと接触した」となると関係部署からあらぬ嫌疑をかけられるなどのとぼっちりがゆき、多に迷惑することになります。

とくにシナイ半島は当時イスラエル軍が撤退してエジプトに返還されてからまだ数年しか経っておらず、国連の停戦監視団に代わる多国籍軍監視団が常駐しているという準戦時体制下に置かれていましたから、その緊張感はほかの場所の比ではありませんでした。日本政府もこの時点ではたしかシナイ半島を「国際紛争地域」に指定していたと思います。それにこの年は例の湾岸戦争が起こった年で、シナイ半島は直接の影響は受けませんでしたが、すぐ近隣のサウジアラビアやイラクやヨルダンは大変なことになっていたわけです。

ところでシナイ半島中央部の山岳地帯には、旧約聖書のモーゼの十戒で有名なシナイ山の麓にギリシア正教のセント・カテリーナ修道院という巡礼地があって、世界中から観光を兼ねたキリスト教の巡礼者が訪れたのですが、彼らはカイロから直行の冷房・トイレ付きの大型バスでやってくるのがほとんどで、また半島南部にはダイビングなどマリンスポーツで売り出し中だったシャルム・シェイクなどの観光拠点もあったのですが、そうした人たちは幹線道路や決まったスポット以外に足を踏み入れてはならないという警告が出されていました。地雷や不発弾がまだ残っている可能性があるというのがその理由でした。

なお、我々の約10年の一連の調査が一段落したあとは、2001年のニューヨーク同時多発テロを機にアル・カーイダ、そして最近ではイスラム国の活動とも相まって、シナイ半島の治安悪化が叫ばれ、日本政府外務省も危険情報レベル3の渡航中止勧告（＝「その国・地域への渡航はどのような目的であれ止めてください」）を現在も出し続けています。そういう意味では、1980年代までの数次にわたるイスラエルとの戦争とその後遺症、そして2001年以降の「対テロ戦争」という、外国人立ち入り禁止状態のあいだのわずかな隙間だった1990年代の約10年間にシナイ半島で調査ができたということは結果的にラッキーの一言に尽きますし、それだけ我々の調査報告はひじょうに貴重なものであると自惚れているわけです（笑）。

ついでに申し上げておきますが、私がお世話になったり話を聞かせてもらったりしたベドウィンの族長さんたちの何人かは、2000年代にテロリストに連座したとか手引きしたという嫌疑でエジプト政府に逮捕・監禁されたということを間接情報として耳にしています。大変残念なことではありますが、今思えば、シナイ半島のベドウィン(=部族民)というのは一応エジプト国籍ではあるが、一般のエジプト人とは違った連中、問題含みの連中といった扱いだったんです。なにかことがあれば真っ先に疑われる。政府だけではなく、庶民の中にもそういった感情があった気がします。川床さんの専属運転手でカイロとトゥールを行ったり来たりしていたカイロっ子のおじさんが私に「ベドウィンは怖いぞ、あんたは怖くないのか? よくあいつらと話ができるな!」と言っていたのが耳に残っています。

このあとお話ししますが、南シナイ県の県庁の中に「部族課」というセクションがあって、私はその課長さんなくしては私の調査はなかったというくらい感謝しているのですが、よく考えると行政機関の中にわざわざ部族を扱う部署が設置されていたというのは、部族が政府から特別扱いされていることを物語っているんだなあと、しばらくしてから気づいた次第です。

さて話を戻しましょう。トゥール到着の翌日、早速情報省の南シナイ支所に出向き、支所長に会って挨拶をしました。そこでは、トゥールの町の外へ取材に出るときには日時と場所を事前に書面で知らせるようにと釘を刺されました。さらに、調査時には情報省からムファッティシュ(査察官)が同行することも告げられました。しっかり見張られることになり、思った以上に嚴重だなという印象で、今後ずっとこれかと、先行きが思いやられました。これじゃ自由な調査なんてとても無理だよ。しかしその翌々日、100キロほど北にあるアブー・ズネイマという町の聖者廟を見に行こうとして情報省へ告知しに行ったところ、査察官が忙しいから一人で行ってよいとのこと。

解放された気分で一日を楽しみ、トゥールハウスに戻って満足げに夕食を食べていると、夜9時頃になって「公安から呼び出しが来た」とハウスのスタッフから告げられ、青くなりました。こんな時刻にいったい何事だろうと疑心暗鬼になりました。今日一日自由勝手に行動してしまったことと、公安にはまだ顔を出してなかったこともあって、「しまった」という思いがよぎったのです。相手が国家公安庁では無視できませんから、夜間にもかかわらず出頭することにしました。とはいえ一人で行ったのでは何が起るかわかりませんから、発掘隊に以前から同行しているいわば身内の考古庁の査察官と一緒にってもらうことにしました。身元保証人みたいなものです。そして川床さんには「今夜私が戻れなかったら、明日動いてください」と言い残して、市内のはずれにある国家公安庁トゥール支部のオフィスへ二人で向かいました。

私がなぜそこまでビビったのかというと、以前「赤坂小町の旅」でモロッコを旅行中、道路検問をしていた憲兵隊に理由も告げられずに、有無をいわせず留置場に引っ張っていか

れ、一週間近く監禁された経験があったからです〜〜もしここで我々が殺されたとしてもだれにもわからない。我々がここにいることさえだれも知らない。我々の命なんてその程度のものなんだ〜〜。このとき以外にもその後、これほどではなかったにしても、すんで拘束といった場面には何回か遭遇しました。そうやって憲兵隊とか警察、公安というのは理屈や道理や筋が通じない問答無用の実力組織だということを身をもって知っていたから、このときも怖かったのです。パスポートとか許可証とか紙つきれなんて、いざとなれば何の役にも立たない！ しかも先ほど述べたように、シナイ半島は軍事的にも最前線でピリピリしている場所だったわけです。

で、とにかく公安のオフィスに着くとムディール（署長）の部屋に通され、尋問を受けることになりました。ムディールは中肉中背で、軍服のような制服をきちっと着こなし（公安は内務省ですから軍とは別組織ですが、制服は似たようなものでした）、大きな机の向こうに座ったまま無駄な動きはせず、眼光鋭く、エジプト人によくある人の良さなどみじんも感じさせませんでした。私がアラビア語で挨拶を始めるとそれを遮り、「おまえは英語が話せるか」と来ました。彼の英語はエジプトなまりのいいかげんな英語ではなく、きちんとしたものでした。そして「今日、アブー・ズネイマへ行っただろう」と問いかけられました。さすが公安、情報が早いなどビビりました。おそらくトゥールの情報省からはすでに連絡は行っているだろうし（情報省なんてのは公安＝内務省に比べれば下っ端の手下のような役所ですから）、沿道にはおそらく民間人の諜報者（＝「ムハーバラート」といって、どこにでもいると思った方がいいでしょう）もいるし、もしかしたらベドウィンの中にも通報者はいる可能性があります。完全監視だなど覚悟を決めました。しぐさや話し方、態度から察するに、相手はたぶん最前線を経験してきた百戦錬磨の強者でしょうから、こういうときは下手な嘘は簡単に見破られるし、おかしな言い訳もしない方がよい。私は朝からの経緯を包み隠さず述べ、カイロで発行してもらった紹介状と身分証明書を見せた上で、これから南シナイの各地をまわって「民衆音楽の取材」をし、それに必要な付加情報としてベドウィンの生活全般に関する話も聞く予定である旨を説明しました。彼はその間ひとことも発さず、私から目をそらすことなく、じっと聞いていました。そして最後に「シャルム・シェイクとヌウェイビア（いずれもアカバ湾岸の町）にも公安があるから、行ったら顔を出すように」と言って席を立とうとしました。私はせめてもの抵抗として、相手の気分を害さない程度に、「もし差し支えなかったらお名前を聞かせていただけますか」とアラビア語で言った。内務省や軍はみな匿名で活動をしていますから、こうしたことはふつうは尋ねません。彼は一瞬間を置いてから、名前を告げて部屋から出て行きました。2時間くらい経っていたでしょうか。建物の外に出ると、同行してくれた考古庁の査察官がフーッと大きく息を吐いて、私の肩に手を回して握手を求めてきました。エジプト人にとっても公安は怖かったのでしょうか。

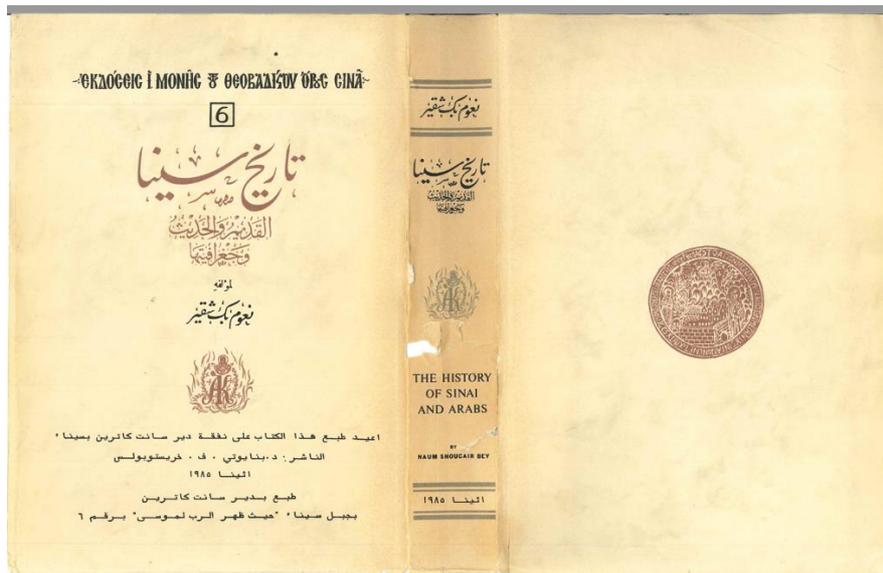
こうしてしばらくは情報省の査察官付きで山奥の幾つかの聖者廟を見に行っただのですが、3日目くらいになると査察官が「もういいから、あなたたちだけで行っていいよ」というこ

とになりました。公安がすでに私たちのことを知っているという安心感もあったでしょうし、彼はカイロ育ちの都会っ子ですから、砂まみれになってガタボコ道を山奥まで歩いて行くのはいやだったのでしょう。それに私たちが何をすることもだいたい見当が付いたようでしたから。私としては「しめしめ」でした（笑）。

さて、トゥール周辺については大分様子がわかってきましたが、まだ私には南シナイのベドウィンに関する基本情報や人脈が何一つありませんでした。そこでとりあえず宗教省のトゥール支所へ行って長官に会ったのですが収穫なし。ただそこで長官から県庁へ行ってみるといいかもしれないと言われ、県庁へ赴きました。県庁で「ベドウィンのことを知りたいのですが」とぶっつけで切り出してみると、庁舎の片隅の「部族課」というところへ連れて行かれました。そして風采の上がらない感じの課長が出てきて、手書きの部族長のリストを見せてくれたのです。じつはこの課長（ヌール氏といいます）が見かけとは違ってなかなかの人物だったのです。かなり頻繁に部族長たちと会って、集落の名称とか人口とかを聞き取っては書き留めていたのです。それらは公文書ではなくて、彼の個人的なメモだということでした。仕事熱心といえばそれまでですが、2～3年ほど後に彼が人事異動で去って、次に赴任してきた人物はまったくそうしたことに無関心だったので、やはりヌール氏の人柄というべきでしょう。なおその後いろいろところで族長さんたちに会ったとき、ヌール氏の名前を出したらほとんどの場合好意的な反応だったので、やはりヌール氏にはベドウィンのあいだで人望があったのだと思います（ところで、役人の名前を出すことは、私自身が役所・政府側の人間ではないかと疑われて警戒心を抱かせる逆効果をもたらすこともあるので、結構微妙なことなんです）。

話を戻しますが、ヌール氏は、私が目を輝かせてメモを読んでいると、「持って行ってコピーしていいよ」というのです。当時コピー機は県庁にもあるにはあったのですが、めったに使わせてもらえない雰囲気だったので、トゥールハウスに持ち帰ってすぐにコピーし、ヌール氏に返しました。この資料が私のシナイ調査の突破口になったのは言うまでもありません。

この日の翌日、水野先生とセント・カテリーナ修道院へ行った帰り、バナート修道院という分院で運良く購入できた『シナイの歴史』という本も、ヌール氏のメモと並んで役に立ちました。この本は1916年という昔にナウム・シュケールという人が書いたシナイ半島に関する説明書で、地理、歴史のほかベドウィンの言葉・宗教・生業・生活等について書かれた貴重な記録です。1975年に修道院がその重要性に鑑みてリプリント出版したもので、発行部数が限られている限定出版のためたぶん入手できないだろうといわれていた伝説的な本です。情報が古いとはいっても、部族の名称や構成の概要を知るには十分でした。書店での一般販売はありませんから、購入できたのはラッキーというよりほかありませんね（下の写真）。



ナウム・シュケール著 『シナイの歴史』

さて、私や水野先生の場合、トゥールハウスに引きこもっていても仕事になりませんから、数日後に「旅に出る」ことにしました。まだ南シナイがどういうところか全然知らなかったの、とりあえずざっとまわってみて地理感覚を養おうという狙いでした。とはいえ漫然とまわってみても観光旅行になるだけでなんの収穫もありません。そこで先ほどのヌール氏のメモが効いてくるわけです。そこに書かれた部族の族長さんたちの何人かにだけでも会って話が聞ければ、それを引き金に人脈が広がるだろうと考えたのです。もちろん名目は「音楽の取材」ですから、族長さんたちにだれか楽器の演奏をしてくれる人とか歌を歌ってくれる人はいないだろうか、という相談をするわけです。ただ水野先生にとってはそれは名目でもなんでもなく、本来の大目的だったのはいうまでもありません。音楽を隠れ蓑にしたのはあくまでも私の事情です。

というわけで、今度はちゃんと事前に公安にも挨拶したあと、水野先生と二人の「シナイ半島族長巡りの旅」と相成りました。期間としては結果的に約1週間程度の小旅行でしたが、収穫は大でした。濃密な時間だったといえるでしょうね。この間行く先々で約8名の族長(シェイク)ないしその縁者と会い、7~8名のベドウィンから楽器の演奏をしてもらって録音しました。族長の中にはその後何度も会った人もいるし、族長から別の誰かを紹介してもらって会った人も大勢います。人脈作りや情報源の確保という点で、この小旅行がその後の私の調査の基盤になったわけです。

ところで、ここで一人の人物を紹介しておかなければなりません。いわば私の専属の運転手ともいえるシャーキルという名の地元のベドウィンです。私と同年齢で、オンボロとはいえ自分の自動車を持って、タクシードライバーとして生活していました。川床さんたちがト

ウールに拠点を構えてからは発掘隊が地元で車を雇うとき、シャーキルを使っていたのです。しかし私がシナイ半島に通うようになってからは、私が移動するときずっと行動を共にしてくれました。運転手というのは、サウジアラビアでもモロッコでもそうでしたが、ただの使用人ではありません。プライドを持ち、周囲からもそれなりに認められた立派な職業なんです。かつてはラクダ乗りが砂漠では最も尊敬される仕事だったといわれていますが、ラクダを車に乗り換えた現代版ラクダ乗りなのかもしれません。そして運転手はいろいろなところに友人・知己がいて、その情報網の広さはちょっと想像が付きません。ですから私にとっては単なる「足」ではなく、いろいろな人に会うときの仲介役となってくれたのです。また彼が地元のベドウィンであるということが、たとえ初対面の異なる部族の相手であっても、一定の安心感を与えたことは間違いないでしょう。そして面白かったのは、私と一緒にあちこちで族長さんたちや老人たち、あるいは楽器の奏者たちなどに会ってさまざまな話を積み重ねてゆくうちに、あるいは山奥の聖者廟を訪れたり部族の夏祭りに行ったりすることなどを通じて、シャーキル自身も自分の知らなかったことがずいぶんわかるようになったと言っていたことです。地元の間人であっても知らないことはたくさんありますからね。二人して知見を広めたといえるかもしれません。



左がシャーキルと彼の車、中央が私、右はガソリンスタンドのオーナー（エジプト人）  
（半島中央部のナクルというところで、泊まる場所がなくて、ガソリンスタンドの地下の倉庫のようなところに泊めさせてもらいました。ものすごい寒さで寝付けませんでした。この写真は、早朝出発しようとしたところエンジンが冷えすぎてかからず、1時間くらい格闘して苦笑いしているところです。）

シャーキルとは一緒に過ごした時間が長かったので、ずいぶんいろいろなことを話したり、教えてもらったりしましたが、一番印象に残っているのは最初に会った頃。彼が自分の

部族を「ハウエイタート」だと言ったときでした。まず驚いたのは私でした。なんでこんなところにハウエイタートがいるんだ！じつはサウジアラビアでの地図作りの時、この部族の土地を歩き回ったことがあったんです。まさか海を隔てた別の国であるエジプトのシナイ半島にも同じ部族の人たちがいるなんて想像もしませんでした。そのときのショックを綴った短いエッセーがあるので読んでみてください。《堀内正樹 1993 「シナイ半島で知ったこと」『人文論叢』51号、二松学舎大学。pp.230-231》

続いて目を丸くしたのがシャーキルのほうでした。私がヒジャーズ地方のムウェイリフという海岸の村でお世話になったハウエイタート族のシェイク（長老）の名前を覚えていて口にしたら、「ええ？なんで知っているんだ」というわけです。シャーキルは若い頃ウンムラジとかムウェイリフといった紅海沿岸のハウエイタート族のいる村や町へ行ったり来たりして商売していたのだそうです。当然そのシェイクたちのことも知っていたのです。私がかくかくしかじかと事情を話したらようやく納得しましたが、そのときの驚いた顔は忘れることができません。これで一挙に彼とは仲良くなり、彼も進んで私に協力してくれるようになったのです（ときにはお節介もありましたが。笑）。偶然がもたらしてくれた幸運ですね。なおまったくの蛇足になりますが、昔『アラビアのロレンス』という有名な映画がありました。若いみなさんをご存じないかもしれないですね。ハウエイタート族はその映画の中にも登場していて、名優アンソニー・クイーンがこの部族の無知で強欲な族長の役を演じていたので、映画で作られたイメージはかなり悪いです（泣）。

さて第一次調査は、その後もほぼ単独で（もちろんシャーキルと一緒にですが）聖者廟調査と族長巡りを続けました。セント・カテリーナ修道院周辺で大雪に見舞われたりとか、ワーディーの奥で雨に流されそうになったりとか、砂が深くて車では無理なのでラクダに乗り換えたりとか、ある族長さんの家で続々と人が集まってきて突然全部族選出の次の国会議員をだれにするかの激論が始まったりとか、さまざまなことがあったのですが、詳細はきりがないのでやめておきましょう。

-----

#### <第二次調査> 1992年8月

最初の調査が終わった約半年後の夏、第二次調査に出かけました。このときは前回から間がなかったこともあって、手続きは前回とほぼ同じで順調でした。初回のときのような気苦労や不安もなく、カイロでもトゥールでもお役所まわりや挨拶を滞りなくすませました。

この調査のハイライトは、シナイ半島最古と言われる小部族ハマダ族がワーディー・フェイラーンの上流にあたる無人のワーディー・サハウという荒野でおこなう「ズワーラ」（直訳すると「訪問」と呼ばれる夏祭り（あるいは部族祭、聖者祭）に参加したことでした。ズワーラはどの部族もおこないますが、だれかの葬式が出ると延期されたりするので、直前まで開催日は決まらないことが多いのです。だからこちらとしては予定が立てられなくて

困るのですが、それは仕方ないですね。

このときはまずすでに懇意になっていたアレーガート族のマハーリブ族長にアレーガートのズワーラの情報提供をお願いしていたのですが、それが急に延期になったので、マハーリブ族長からジャラジュラ族の族長さんを紹介してもらい、その族長さんからハマータ族のズワーラが今度の木曜日にあるという情報をもらったのです。そこで水野先生と一緒に炎熱地獄の中を山奥まで出かけてゆきました。ハマータ族のスライマーン族長に挨拶し、その晩は会場となったハッシャーシュ廟のワーディー脇にテントを張らせてもらって、祭りの一部始終を見ることができました。そのときの模様は前回の本《堀内正樹 2007 「アラビアの砂漠—アラビア半島とシナイ半島の人々の生活と文化」『世界の砂漠—その自然・文化・人間』(堀信行・菊地俊夫編)、二宮書店。 pp.19-50》にも書きましたのでご覧ください。あ、ちょうどよいのでシナイ半島の概況を知っていただくためにも、その本の2節と3節をお読みください。それから先ほどシャーキルの紹介のところで読んでいただいたエッセーの後半部分もこの祭りのときの経験です。ともかくこの祭りで圧巻だったのは、日没後におこなわれた部族会議でした。砂漠の中にこれだけの人数が勢揃いするのは、後にも先にも見ることはありませんでしたし、そもそも部族会議なんてそう簡単にお目にかかるわけではありませんから。



ハマータ族の部族会議 (1992年)

-----  
<第三次調査> 1993年12月～1994年1月

第三次調査は前回調査から1年半後の冬でした。ツールに着いて、もうお決まりの役所への挨拶回りをしたのですが、情報省では査察官が変わり、恐怖の公安庁も眼光鋭い署長

が去り、別の人が変わっていました。

この調査でも私はあちこちへ出向いていろいろな人に会い、いろいろなことを聞いてまわりました。夏祭りでお世話になったハマード族のスライマーン族長についてもアブー・ズネイマにある自宅を訪れ、祭りのときの写真を渡して、逆に自宅で大歓迎を受けました。そのほか聖者廟調査も執念深く継続しました。運転手のシャーキルからは「シナイの聖者廟をあんた以上に知っているベドウィンはいないよ」と冗談交じりに言われる始末でした。こうした調査の詳細は次回お話しします。

この第三次調査のハイライトはワーディー・スイドルというところでおこなわれたベドウィンの結婚式だったでしょう。私がシナイ半島で一番懇意にしてもらっていたアレーガート族のマハーリブ族長がこのときも一肌脱いでくれました。

マハーリブさんについてちょっと紹介しておきますね。彼はスエズ市に近いラアス・スイドルという町に自宅を構え、自宅脇には「マグアド」（直訳すれば「座る場所」）という部族集会用の小屋を持っていました。私はこの町を通るたびに彼のもとを訪れました。人望のある人らしく、いつも訪問者が絶えませんでした。息子のムハンマドとも親しくなり、なにかと世話になりました。息子はカイロでコンピューターを勉強してきたとあって、自宅にIBMのコンピューターを備えていました。今と比べればおもちゃみたいな代物ですが、当時はもちろん最新鋭の機器です。ちなみに私が日本でコンピューター(Mac)を使い始めたのが1990年頃、つまりこの調査の2～3年前ですから、まだ実用にはほど遠かったとはいえ（しょっちゅうフリーズして爆弾マークが出て、そのたびに再起動！）、シナイ半島でベドウィンがコンピューターを持っているというのは、正直驚きでした。でもそういう偏見がいけないのですが・・・。



右がマハーリブ族長の自宅、左の掘っ立て小屋が集会所

さて、このマハーリブ族長からの情報で、アレーガート族の結婚式がワーディー・スイドルのリエナ村でおこなわれ、族長が事前連絡しておくから出席してよし、ということになったのです。トゥール市周辺では何度か結婚式は見ていたのですが、町の結婚式とは違う「本格的な」結婚式は初めてだったので、期待して水野先生とそのお弟子さんの粟倉弘子さんと

連れだって出かけました。期待を裏切らないイベントでした。ポイントは三つ。一つは「掠奪婚」つまり嫁さんを実家からむりやりさらってくるという形をとること。二つ目は「ダッヒーヤ」という形式の歌舞をおこなうこと。三つ目は長老たちが若者に「グッサ」という昔語りをしてやること。このいずれをも目撃できたというのは幸いでした。

---

#### <第四次調査> 1996年7月～8月

第四次調査は夏にモロッコでの調査が終わったあと、モロッコのカサブランカ空港からカイロ空港への直行便で駆けつけました。このときの目的は、発掘隊と一緒に、セント・カテリーナ修道院への昔の伝統的な巡礼路をラクダに乗って実際に踏査するという計画を実行に移すことでした。この踏査プロジェクトに当たっては、順路の計画段階で私は中心的な役割を担ったと自負しています。

計画作成に当たっては、まずはカイロの事務所にいるエジプト人スタッフに頼んで、南シナイ全域をカバーする詳細な国土地図をしかるべき場所から入手してもらい、だいたいの行動範囲に目処をつけました。地図は9葉からなっていました。地図を見るのはサウジアラビア以来お手の物ですから苦労はありません。10万分の1の地図で、1930年代の発行でしたが、なんの問題ありません。次にすでに述べたナウム・シュケールの本から巡礼路の記述部分を拾い出し、それを地図上に落とし込むという作業がありました。最後に、それまでの調査体験をもとにして、地図上の距離から移動の所要時間を割り出しました。

この踏査行の参加者はかなりの人数になり、一大キャラバンの様相を呈しました。その様子を小田淳一さん（東京外国語大学、情報学/民話学）が軽快なタッチで描写していますので、興味のある方はお読みください《小田淳一 1996 「南シナイ旧巡礼路踏査記」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第88号、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。pp.1-10》。なお小田淳一さんと、彼の文章の中に登場する西尾哲夫さん（国立民族学博物館、言語学/言語人類学）は、水野信男先生や私も含めて、トゥールハウスでの遭遇をきっかけに今日まで世界各地で何回も調査をしてきた仲間です。

ここで恥ずかしい釈明をしておきますと、当日朝の本番に際して、予想される日中の灼熱地獄に恐れをなしたのと、折りからの疲れによる下痢とで、私はラクダに乗る直前に敵前逃亡つまりリタイアし、急遽サポート隊にまわったのでした。情けない話です。こうして旧巡礼路踏査がおこなわれたのですが、実際がなかなか計画通りにはゆかなかったというのは当たり前です（笑）。

---

#### <第五次調査> 1999年7月～8月

前回の調査から3年経っていました。それまでのシナイの調査を振り返ったとき、やってきたことはなるべくたくさんの人に会って話を聞き、なるべくたくさんの方を訪れ、な

るべくたくさんのイベントに参加するということでした。こういう調査方法をテクニカルには「Extensive Survey」と呼ぶのですが、こうしたやり方には一定の限界があります。つまり「全体像」をつかむのには適していますが、一人一人の生活に即した有機的な世界観は見えてこないということです。平たくいえばナマの感覚がつかめないということですね。

そこで私は「Intensive」な方法に切り替えてみようと思ったわけです。地図作りのときの話にたとえば、鳥瞰図から虫瞰図に切り替えようということです。私が本来目指していたのはその方向だったのですが、現実的には夏休みか冬休みに1～2ヶ月くらいしか訪れることができなかつた。それでは無理です。もちろん四六時中一緒にいなければならないということはないのですが、必要に応じて春だろうが秋だろうが、いつでもその場にいられる状態がなければいけません。そうすると第1回目の授業で触れましたが、最低でも1年や2年はフリーな時間が必要になります。あるいは商売や結婚などでもいいですが、その土地に長く暮らすということでもかまいません。

1980年代くらいまでは、大学の先生でも授業を突然休講にしてフラッと現地に飛ぶ、なんてことが許されていましたが、21世紀に入ってから大学の先生、特に授業を担当している人たちにそういうことは許されなくなりました。単に授業だけならまだしも、教授会だとかなんとか委員会だとか、いわゆる大学の「アドミニ」の仕事にがんじがらめに縛られていますから、本来の意味での、つまり残余経験を積むためのフィールドワーク（＝「職業としてのフィールドワーク」ではありません）はどんどん可能性が狭められていることはたしかです。たぶん日本の研究・教育システム全体がそうした「はずれたもの」「こぼれたもの」「不確かなもの」を不要としているのかもしれませんが、「地図があればそれでいいじゃん」ということなんですか。

話を戻すと、いきなり虫瞰図といってもそれはやはり無理でしょう。どこか知らない土地に出かけていってだれかを捕まえ、「あなたは何を考えているんですか」なんて上から目線でインタビューをしたって、相手は面食らうだけでしょう。皆さんが、自分がそうしたインタビューを受ける立場を想像すれば一目瞭然ですよ。ある程度まではその人が暮らしている土地の事情や、そこで生活している人たちの顔を具体的に知っていなければ、話は成り立ちません。具体的なことが一番大事なんだろうと思います。そういう意味で、私自身は1990年代の約10年間のシナイでの仕事を準備期間だと思っていました。十分とはいえないけれども、それでも今後時折り訪ねていってなにかを一緒に話すくらいのはできるだろうと考えたわけです。

そこでこの年は、手始めに身近な人と集中的に話してみようと思ったわけです。その相手が、川床さんたちの発掘現場の夜警として雇われていたムーサーというおじいさんでした。アウラード・サイードという部族の老人で、日没になって発掘作業の人たちが引き上げたあと現場にやってきて、一晩中朝までテントに泊まり込んでいました。夜警といっても何か特別なことをするわけではなく、ただその場にいるだけです。このムーサー翁と毎晩2～3時間、あれやこれや気の向くままにお喋りをしました。6日間、そうした砂漠の夜語りにつき

合ってもらったわけです。そのときの話の中身をまとめたものが何度も出てきた『世界の砂漠—その自然・文化・人間』の第3節です。文章にするとわりあい整然としていますが、実際の話はあっちに飛び、こっちに飛び、まとまりがなかったのは当然です。私の「編集」がかかっているのですから、そういう意味でナマの話ではもちろんありません。

なお、この時ふっと突然思い出したのが、第2回目の授業の旅の話の中に出て来たイラソンの建築中の家の土間に寝ていた老人の姿だったのです。もしかしたらこのムーサー翁と同じように「夜警」としてあそこに泊まり込んでいたのではなかろうか。もう力仕事のできなくなった老人にできる仕事として、これはアリだなと思った次第なんです。いろいろなことは突然結びつくんですね！（なおムーサー翁は2002年ごろ亡くなったそうです）



ムーサー翁の自宅のある村で

私（左端）、ムーサー翁（左から二人目）、翁の親族

こうして方向転換した私は、「今後はこのセンでいこう」と思っていたのですが、そのあとすでにお話したように2001年にニューヨーク同時多発テロが起こって、シナイ半島にはもう行けなくなってしまいました。私のシナイ半島の調査は宙ぶらりんのまま止まっているとってよいでしょう。

次回はシナイ調査の「報告」を読んでもらって、報告がどうやってできるのか、そのプロセスを考えてみたいと思います。

おわり